

子ども環境学の先導者・細谷俊夫

—子ども学の先駆者たち

③—

学校法人白梅学園 理事長

小松 隆二

1 細谷俊夫の見直しの必要

—忘れられた著書—

子ども学にあつては、学としての確立や研究の本格的な深化はこれからである。それだけに、従来の子ども研究の成果、あるいは子ども学の歴史を振り返ること、それによって今後に活かせる蓄積の内容や深さを確認することも必要である。

そこで気づくことは、一方で児童学なる用語を自らも使用していながら、子ども学の領域では忘れられている人がいることである。他方で児童学や子ども学と

いう用語はとくに使用していないので子ども学界では忘れられているが、研究の先駆性から子ども学の研究史にあつては無視できない人もいることである。前者には、本誌創刊号及び第二号で取上げた上澤謙二や坪内逍遙らがいる。後者には、高田慎吾、土田杏村、細谷俊夫らがいる。いずれも、それぞれの専門領域では著名で顕著な実績を残しているが、児童学や子ども学ではめったに名前が出てこない人たちである。

今回も、児童学・子ども学では先駆者としてよく知られた高島平三郎や関寛之らではなく、この領域では顧みられることがなくなっている細谷俊夫を取上げる

ことにする。

もちろん、細谷その人が現在全く忘れられてしまったということではない。細谷の研究や教育の業績は、教育方法や技術教育などにみられるように教育学界では今も生きている。『教育環境学』という著作を通して、教育学を超えて環境学との関わりも微かに記憶されている。しかるに、児童学・子ども学の流れからは、細谷の名前は脱落に近い状態である。また環境学においても、環境にかんする先の著書のタイトルが知られている程度で、細谷の名はほぼ忘れられかけている。

実際に、子ども学の研究の推移や動向をみると、細谷はこれまでは明確には評価されていない。しかし、子ども研究や子ども学の過去の足跡をふり返るとき、また今後の子どもの学の深化や学としての確立を考えるとき、細谷の残した業績は有意義な素材や理論的・方法的ヒントを提供してくれている。

細谷は、子どもの成長・発達にも、またそれらに対する総合的研究にも、環境の問題が意外に重要な位置にあることに早くから着目していた。それだけでなく、彼は、環境の重要性の認識から、その研究を教育環境学、さらには児童環境学として学にまで止揚する挑戦も行っている。とくにその挑戦が、一九三〇年代という早い時期になされたということが驚きなのである。環境を学として認識する人、あるいは環境学を目

ざす人などまず生まれようもなかった時代である。

細谷という人は、環境・環境学といった当時にあつてはマイナーな領域・課題に眼を向けていたが、大学における教育・研究・経営活動全体に目を向けてみると、広い部門・課題にかかわっていたことがうかがえる。ただ、よく知られているのは、教育学の領域における研究・教育である。論文・著書も大方が教育学関係のものである。とくに専門としたのは、教育方法（論）、技術教育・産業教育、学校経営などの研究と教育である。また、学長、学部長、学科長、理事、評議員なども経験しているように、研究・教育のみではなく、学校経営・運営にも携わっている。

そんな中でも、今日に生き、今後も生き続ける細谷の業績という場合、私は、彼の教育および児童をめぐる環境学の提唱と考えている。細谷の業績と言えば、上述のように一般的には教育学、とくに教育方法や技術教育・産業教育の研究が知られている。それに学校経営論も時には注目されることもあるが、教育環境学、とくに児童環境学が十分に評価されて顧みられることはまずない。

例えば、『細谷俊夫教育学選集』（教育出版、一九八五年）では、処女作の『教育環境学（目黒書店、一九三二年）は、本巻ではなく、辛うじて別巻に収録されたが、第二作の『児童環境学』（刀江書院、

一九三五年）は同選集には収録されていない。しかも「解説」でもとくには言及されていないし、別巻の「略年譜」や「著作目録」においても、『児童環境学』は忘れられている。

『選集』における、これらの扱いは細谷の意向を受けたものとも推測できなくはない。その場合、細谷自身は、同書の内容が明らかにされることを喜ばなかったのかもしれない、などとありえないことも推測したりする。『児童環境学』のその後の扱いにはそういう不自然な感を抱かされるが、さらに『選集』別巻の「解説」でも、「第二の著述としての『技術教育』（上沼八郎「解説」、前掲『細谷俊夫教育学選集』別巻、二〇二頁）とあり、第二の著作が『児童環境学』であることは、専門の研究者の間にも認識されていない。学者・研究者の世界で、特定の著作を意図的に無視あるいは排除したとはどうしても考えられない。単純に『選集』編者たちの認識から脱落していたにすぎないものと受け取る以外ないであろう。

ちなみに、細谷はその頃雑誌類にも教育・子どもと環境について執筆している。例えば、『児童』（刀江書院）の一九三六年新年号に細谷が中心になり、「子供の生活環境」を特集している。そこで、彼は「教育環境概観」を担当している。しかし、それらも「著作目録」から漏れている。

いずれにしろ、細谷の二つの環境学にかかわる著作は、たとえ問題を抱えているにしろ、一九三〇年代前半に環境学の視点・枠組み、そしてその必要性・重要性を提示したことだけでも評価されてよい。

そこで、今回は子ども学の先駆者として細谷俊夫を取上げることにしたい。ただし、私は教育学でも心理学でも門外漢であり、あくまでも、子ども学でも環境学領域でも十分に顧みられない細谷と彼の先導した教育および児童をめぐる環境学を紹介し、再評価する程度にとどめざるをえない。その先の深い研究、さらに展開的研究は、若い専門の研究者に譲らざるをえない。

2 環境学への細谷の挑戦と先導性

選集まで刊行された細谷であるが、彼自身も、また彼の周辺の人たちも、上記『細谷俊夫教育学選集』別巻「解説」の説明からもうかがえるように、今日に、また今後に生きる彼の業績については、適切に理解・評価できていたかどうか、疑問なしとはしない。

細谷は、環境学、とりわけ児童環境学・子ども環境学に関しては日本における草分けであり、最初の提唱者である。さらに、提唱するだけでなく、児童の生育、成長、発達における環境の位置・役割の重要性に鑑み、実際にそれらに教育環境学、児童環境学として

自立的な学的位置を与える挑戦を試み、一定の成果も上げている。その点は、現在の子どもも環境学、ひいては子ども学の歩みにとつても無視できない足跡である。

ともかく、細谷は、一九三〇年代初頭に、教育環境学と児童環境学という二つの環境学関連の著作を引っさげて先導的に進んだ。もちろん、環境そのものは、意外にも多くの人によって、それ以前から注意を集めていた。すでに一九二〇年代、さらに細谷が環境学の著作を世に出す一九三〇年代初頭にも、一部の人たちが環境視点・環境学に関心を示しだしていた。第二次世界大戦後、公害認識を超えて、環境認識が全般化に向かうのが一九七〇年代以降であることを考えると、一九二〇年代、三〇年代における環境への関心は十分に注目に値する。

もっとも、一九二〇年代、三〇年代の環境認識は、対象が子どもや教育ということもあって、当時細谷も使った「生活環境」、つまり主に今日いうところの社会環境ないしは社会・経済環境である。それに対して一九七〇年代以降の環境認識は、環境破壊という反公害認識や運動を受け継いでいるだけに、社会性は強いものの、そこで問題にされたのは主に自然環境ないしはそれに関わるものであることに留意を払う必要があるであろう。

そのような流れの中に、細谷は、一九三〇年代早々

に動き出した。その中でも、とくに細谷は、環境学の標題を持った二つの著作を世に送り出したことで、今日の視点からみれば際立っていた。それによって、今日隆盛を誇る環境研究・環境学全体に対しても、細谷はパイオニアの一人に位置づけられてよい。当時、環境に関心を示したものは、意外に少なくはなかったが、なかでも児童環境学・子ども環境学では、その最初の挑戦者であり、その意味では学祖といつてよい。

人間にとつては外的要因・要素である境遇や状況、今日で言う環境は、古くから教育学、心理学、社会福祉学（慈善事業論・社会事業論）などでは重視されてきた。早くは大正期、さらに昭和初年になると、教育と環境の関わりに注目する学者が目立つようになる。ただし、環境を手がかりに新しい学の形成に向けて未開拓の領域や方法を切り拓くという意識や動きは鈍かった。単に欧米の影響で教育学や心理学の研究で環境に眼を向けたり、また救済的な運動をもって環境劣悪な現場で対応したりするだけではなく、一つの完結した体系をもつ学として環境を認識・追究しようとしたのは、日本では細谷が最も早い一人である。とりわけ児童環境学となると、細谷を嚆矢とするといつてよいであろう。

児童環境学は、医学、教育学、心理学、社会福祉学、さらには子ども学などいろいろの領域に活用・応

用できるものである。それだけに、子ども学にあっても、今後のあり方・対応にもよるが、環境領域、あるいは児童環境学・子ども環境学は重要な柱の一つに育ちうる。子ども学とも、子ども学の柱になる児童心理、教育学、小児・児童医学、児童福祉、児童文学、児童芸術、児童スポーツなど個々の分野とも、環境、さらには児童環境学は深くつながりうるからである。

にもかかわらず、教育環境学および児童環境学に対する細谷の貢献は軽視されてきた。近年取り組まれている子ども環境学の分野でも、歴史研究はまだ十分ではない。もちろん、児童環境学に坎する彼の著作まで全く忘れられているわけではない。現に、細谷の種まきが実るように子ども環境学会が誕生し、活動しているだけでも、細谷とその環境をめぐる研究の踏み跡が現代にもどこかに生きていることを教えられる。ただ、それに対する内容理解や先駆性の評価が適切になされているとはいえないのである。

3 細谷俊夫の生涯と児童環境学の展開

(1) 細谷俊夫の略歴と業績

細谷俊夫は、九五年という長い生涯を送るが、教育者・研究者として活動したのは、主に昭和初期から昭

和六〇年代までの戦前・戦後を通した昭和期である。その間、教育学者として、大学において研究、教育、管理・経営のほぼ全域にわたる活動・事業に従事した。

こういった彼の生涯については、『牛歩三八年』（細谷先生還暦記念会、一九七〇年）、前述の『細谷俊夫教育学選集』（一九八五年）、大泉溥博編『日本心理学者事典』（クレス出版、二〇〇三年）、師岡章「細谷敏夫——戦後教育学界の権威——」（『地域と教育』白梅学園、二〇一〇年）などによってすでに大筋は明らかにされている。それらを参考に、ここでは概要を紹介したい。

生まれは、東京、ただし埼玉県に近い北多摩郡清瀬村（現・清瀬市）で、一九〇九（明治四二）年八月二八日のことである。父が小学校教員であったため、その転勤にあわせ、小学校は都内を転々とする。

西果鴨第二尋常小学校を終えて、一九二二に、東京府立第六中学校（現・新宿高校）に進学する。その後旧制浦和高等学校文科甲類を経て、一九二九年に東京帝国大学文学部教育学科に進んだ。

東京帝国大学で、教育学の修業に励むが、早くも在学中から成果をあげ、論文を発表する。それほど篤学の学生であった。卒業論文のテーマは、「教育と環境の問題」で、内容自体は決してオリジナルなものではなく、方法的にもアメリカ、ドイツなどの研究に学

び、その先行的思想家・研究者たちを詳しく紹介するものであった。しかし、日本においては「環境」の用語はまだ日常化されておらず、著作の標題として使用されることもきわめて少なかった。ましてや、環境学の認識はまだ全く弱い時代であった。

一九三二年に、二三歳で東京帝大を卒業する。同時に卒業論文を見直し、手を加えて『教育環境学』（目黒書店）の標題で処女出版を行う。恩師吉田熊次の指導・世話による出版であった。吉田は同書に心を込めた序を寄せ、「著者細谷俊夫君は東京帝国大学文学部教育学科出身の文学士である。在学中より教育環境学に興味を起し、広く文献を集めて精しく研究を積み卒業論文となした。」と、若い細谷とその成果を評価した。

その処女作は、一九三二年九月五日が発行日であった。満二三歳になった直後のことである。東京帝国大の卒業が当時も現在と同じ三月なので、卒業してから半年後の出版であった。

戦前でも、二〇代前半に研究書を刊行することはやはり珍しい。当然のことながら、学士論文の活字化・公刊はなおのこと珍しい。岡田恒輔『悲哀の情緒の研究』（北文館、一九一一年）、野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（一九二六・二七年刊の新潮社『社会問題講座』第一・一・三卷所収の「日本資本主義発達史」は学生時代の論文を基にしたもの）、加藤哲太郎

『中華塩業事情』（龍宿山房、一九四一年。校訂をした住吉信吾との共著の形に）などは比較的知られたものである。ただし細谷のように卒業後すぐの刊行はそう多くないであろう。

卒業後、細谷は、東京・淀橋第四尋常小学校（現・新宿区立淀橋第四小学校）、岡崎高等師範学校で教鞭をとる。資格のある正規の教員ではなく、代用教員からの出発であったが、専門が教育学であり、小学校の現場で教育にあたる機会を得ることになった。

そのことは貴重な体験となつて後の研究活動に活かされていく。実際に、その後岡崎師範学校教諭を踏み台に、東京帝国大学助手を手始めに大学に職を得るようになってから、教育方法、技術教育、学校経営などの研究領域でかつての教育実践・経験は実つていくからである。

一九三五年、そのような現場体験を生かして、新たに『児童環境学』をまとめ、世に問うことになる。先の『教育環境学』は、日本における現場の実態・事例よりも、概論的に体系、思想、歴史の研究、とりわけ欧米の進んだ環境教育学ないしは教育環境学の紹介に重点を置いていた。それに対し、新作の『児童環境学』の方は、日本における現場の事例を柱に、かつ前著よりも環境の理念や役割にしても自分のものにして分かり易く訴えるものになっている。

翌一九三六年、時代の悪化が顕著になり出す時であったが、東京帝国大学助手、四〇年には、同大講師にすすんだ。この間、いくつかの大学の非常勤講師も兼ねた。

戦後に至り、一九四九年に名古屋大学教授、それからほどなく一九五二年には東京大学教授に招聘され、東京に戻ることになる。東大ではやがて文学部付属中・高校校長、教育学部長、評議員などを併任、定年退職後は名誉教授に就任する。

この間、研究では主たる足場とした日本教育学会の他、新たに日本教育経営学会（会長にも就任）、日本産業教育学会（理事長にも就任）の創設にも関与するなど、学界・学会でも、活躍をする。一九七〇年には、民間出版社の研究所であった教育調査研究所の財団法人化にも積極的に協力、設立代表者として初代理事長に就任している。他に全国保母養成協議会会長も歴任している。

また行政機関関係の審議会・委員会などでも活躍する。審議会関係では、教育課程審議会、教育職員養成審議会、理科教育及び産業教育審議会、児童福祉審議会等の委員を歴任した。

六〇歳に達した一九六九年度を最後に、七〇年三月末に、東大を定年で退職。その後は、立教大学教授、白梅学園短期大学学長などに就任した。白梅学園では

一九七五年一月～一九八三年三月まで、つまり六六歳から七四歳までの八年余にわたり、学長を務めた。この間、短大の二五周年を迎え、『二五周年記念誌』の刊行に協力している。

白梅学園を退職直後に、喜寿を迎えることから、門下生が中心になり、選集の刊行が企画され、実現にこぎつける（『細谷俊夫教育学選集』全四巻・別巻1、教育出版）。それからおよそ二〇年後の二〇〇五年五月一日、九五歳で生涯を終えている。

このような五〇年にも及ぶ教育・研究生活の業績としては、教育・研究の第一線で後身の指導にあたった他、著作類のうち、単著では、先に紹介した『教育環境学』（目黒書店、一九三二年）に続いて、『児童環境学』（刀江書院、一九三五年）、『技術教育——成立と課題——』（目黒書店、一九四四年）、『近代社会の教育』（朝倉書店、一九五二年）、『教育方法』（岩波書店、一九六〇年）が公刊されている。他に『教育方法論』（細谷俊夫編、教育学入門叢書7、誠文堂新光社、一九五五年）など共著・共編や翻訳もいくつか刊行されている。なお一九八五年には、先の通り『細谷俊夫教育学選集』が刊行されている。

以上の著作は、いずれも教育・教育学にかかわる著作である。それにあわせて、細谷は、主として研究・教育に守備範囲を限定して取り組んでいたことがうか

がえる。その中でも教育方法などに最も長く、本人も重点を置いて取り組んでいる。ただオリジナル性の高い挑戦と成果といえ、教育環境学、とくに児童環境学といってよい。処女作『教育環境学』の刊行が二三歳、続く第二作『児童環境学』が二六歳の若さであったことは驚きである。最近ではほとんど考えられないほどの若年での成果とその公刊であった。

(2) 細谷の環境学への挑戦

細谷俊夫は、教育学や心理学関係の人名辞典類には必ずといってよいほど取上げられている。社会運動人名辞典類にも忘れられずに取り上げられている。また教育学の先行研究を取り上げる著作でも、細谷は取り上げられている。

それらでは、細谷といえば、教育学者、とくに教育の理論・方法、技術教育、学校・学級経営などへのかわりや業績が紹介される。ただ、それらには実践面でも、研究面でも、とくに独自性・オリジナル性の高さを認める評価は必ずしも明快にはなされていない。

しかも、いずれの場合も、環境研究、とりわけ児童環境に対する彼の鋭い嗅覚や認識、また研究成果は、軽い扱いを受けている。細谷といえば、教育学者といった平板にとらえられた評価で通されてきた。肝心

の環境学、とりわけ児童環境学に坎する挑戦と成果である著作は、ほとんど評価されなかったのである。

その理由の一つには、一九三〇年代の環境領域にあつては、公害認識が中心で、建設的な意味も持つ環境認識・環境問題が主に社会環境の視点に立つ限られた人たちの間にしか受け止められていなかったこと、研究者の間にさえ環境認識はきわめて弱かったことがあげられる。公害認識ということは、一方で山々、森林、河川、あるいは水田、大気を汚染する社会悪である公害中心の認識であつた。他方で環境という用語を使用する場合にも、劣悪な地域・家庭環境など悪しき社会問題の側面、つまり社会環境に関心が集められ、子どもたちを良き方向に導く環境という今日の前向きの認識には遠かつた。その公害でさえ、被害を受ける特定地域の住民に限定されて受け止められる時代であつた。

それだけに、子どもを取り囲む境遇や状況には教育学者も心理学者も強い関心をもつたものの、それを自立した学、とくに環境を軸にした環境学に育てる関心はなく、社会問題である悪しき境遇・状況をいかに的確にとらえ、取り除くかという関心にとどまつたのである。細谷の環境学という認識に関心を向け、共に取り組もうとする研究者はほとんどいなかったのだ

る。

理由の二つ目には、細谷自身が教育環境学、とくに児童環境学への先駆的な挑戦・研究を長く継続することをしたことが与っているであろう。環境学は、細谷にあつては研究者に巣立つ初心の時代に取り組んだ貴重なテーマではあつた。しかし、それに対する学界における反応の鈍さなどもあり、それを深め続けるよりも、当時にあつてはむしろニーズが高く、教育の現場でも緊急性の高かつた教育方法や技術教育の領域に専門を移していく。よく言えば、周辺の問題から、子供に直接関わる核心の問題に視点を移していくのである。

理由の三つ目には、まだ二〇代前半から半ばにかけての未熟な時代であり、環境および環境学について細谷自身の著作が論理性や分かりやすさにおいて明快に論述されていない面のあることがあげられる。まだ環境認識自体が遅れていた時代に、学者・研究者としてはまだ駆け出しの細谷にそれ以上のことを期待するのは、無理なことであつた。

いずれにしろ、細谷の研究の足跡をたどれば、最初に彼が関心を示したテーマ・課題は、まぎれもなく教育領域における環境・環境学の問題であつた。東京帝国大学の卒業論文がそのテーマあり、処女出版もそれであつたことは、銘記されてよい。

彼が環境に興味をもつたのは、昭和初期という経済状況・生活状況の厳しい時代で、教育や子どもに対する境遇などの環境要因が雇用不安・生活不安、貧困、家庭崩壊、児童労働、公害などマイナス面から深刻に受け止められてよい時代であつたこと、それを感受性の強い若さが真正面から受け止めるようになったことが与っているであろう。それに、環境の意味をよく理解していた恩師吉田熊次の適切な指導があつたことが考えられる。

恩師の吉田は、教育における環境要素・要因をよく理解していた人で、細谷の処女出版前掲『教育環境学』の序に寄せて、教育の任務として、一つには「人格の性能を内部より発展せしむる」こと、もう一つには「之を適当に誘導して環境に順応せしむる」ことを挙げている。環境のことを早くから受けとめていた稀有な人であつたのである。

そういった教育論に立つ恩師の下で、細谷は環境研究に熱心に取り組んだ。とりわけアメリカやドイツが先行した教育社会学、なかでも教育環境学を熱心に学んだ。それが卒業論文としてまとめられることになったものである。

卒業後、その論文に改めて手を加えるとともに、環境研究のうち、教育とかわる部分のみを残すなどの削除・整理も行つて、『教育環境学』として世に問う

ことになった。日本の児童をめぐる環境、教育環境学の具体的な方法や理論を明らかにするというよりも、西洋の進んだ教育環境学の思想や理論の紹介を中心にしたものである。説明にしても、若さも手伝ってやや消化しきれないうらみ、それだけに難解性や観念性が目につく。

それでも、恩師吉田はその著の序において「我が教育学界が本書に依つて最近の病弊を匡し、正道に帰る事を得ば著者の学界に於ける効績は極めて大なるものありと言ふべきである。余は篤学にして勤勉なる少壮教育学徒の此の処女作を広く我が教育家各位に熱心に推奨する者である」と記している。若くして環境に目を向けた細谷を大変高く評価していたことがうかがえるよう。

つづいて細谷は、『児童環境学』を世に送り出す。今度は、観念的・理論的紹介を超えて、日本における子供をめぐる現実の事例の観察、分析にまで入り込む。もちろん、事例のみでなく、児童環境学の具体的な内容や方法も知ることができる。環境に関する見方・説明も第一作よりも分かりやすくなっている。

ところが、この労作および業績が、これまで研究者の視界・視野の外に置かれることが少なくなかった。人名辞典における細谷の項や細谷に関する紹介記事でも、この環境部分、とくに児童環境学部分だけが脱落

しているのが普通である。

この著作以前は、生徒の、また教育の環境を考えるにしても、多くは学校が主で、学校外の環境は付随的・副次的と考える環境認識であった。それに対する批判として、「環境と学校とを対立させることをやめて、学校自身も子どもの環境の一部分に過ぎないと考える」（細谷俊夫前掲『児童環境学』序の二頁）と、つまり学校よりも子ども本位に考えることから、細谷はその理解に沿う児童環境論を世に問うたのである。

もともと教育や教育学は、平板に、また単一にはなく、立体的・重層的認識・理解を必要としている。教育には多様な人間と共に、政策、時代、世代、生活、社会状況、環境など多様なものが重要な意味をもってくる。実際に、そういった認識や状況を、教育学者、さらには心理学者は適切に受けとめ、対応してきた。しかし、細谷以外の人たちは、その全体について環境を柱に理解する方法、さらには環境学として体系的に位置づけ、理論化する認識には至らなかったのである。

実際に、単なる環境や境遇といった用語や状況は、早くから教育学や心理学では、子どもの状況や問題の認識に際しては注視され、使用・利用されてきた。

環境・境遇といったものが、子どもの成長・発達に

とって、また子どもに関する研究・学問にとって、大変重要な意味をもつものであった。細谷は、子ども学を構成することになる研究あるいは学問で、環境が意味のないもの、環境とつながらないものはないと考えていた。実際には、その環境研究を媒介に多くの領域・テーマにわたる子ども研究を連携させ、子ども学に発展させていく可能性もあった。その土台づくりをしようとしたのが、細谷であり、彼の児童環境学であった。本人はそこまで自覚をしていたとはいえないが、早い時期に環境の重要性を認識した数少ない一人であったのである。

かくして、細谷は、環境を自立した研究方法・領域にかなうものとして受け止めようとした最初の一人であり、さらに教育環境学、とくに児童環境学という体系に日本において最初に立ち向かうとした人であった。

4 細谷および子ども研究における

環境の意味

(1) 環境とは何か

環境とは、人間が快適に生活する空間であるが、定義的に言えば、「大気、水、土、地勢、地域など、自

然的・地勢的諸事象、あるいは経済的・社会的・文化的諸事象と人間の相互作用が織り成す状況・空間である」。換言すれば、山々、森林、河川、里山、景観など、また商店街、繁華街、歓楽街、工場街、学校街など、さらに家庭、家族、生活状態・水準、住居・住宅街の風紀・景観など人々の四囲にあるものと人々が、相互交流・相互作用を行うことによって現出・認識される空間状況をいうのである。

細谷によれば、環境とは「個人と外界との間のあらゆる可能な関係を織り込んだ網の様なもの」(細谷俊夫前掲『教育環境学』二五七頁)である。それは多様であり、特定の場のみを指すのではない。つまり、ただ場があり、自然やまちがあれば、ただちに環境が成り立つのではない。それらと人間との相互作用があつて初めて子どもの成長・発達の糧となり、かつ科学なり学問なりの対象となる環境が成立する。人間が中心にあり、事物、事象、自然との相互作用があつて、初めて科学認識の対象になる環境は成立するのである。

実際に、同じ景観、同じ商店街・繁華街、同じ住宅街でも、人によって受けとめ方も、意味も変わってくる。人間あつての環境であり、人間との相互関係こそ環境を成立させるのである。「環境は、土地の表面の場所を指すのではなくて、人を中心を持つものである。

る」(細谷俊夫前掲『児童環境学』九頁)。

このような理解は特殊な認識ではなく、戦前から一般的なものであった。例えば、野口樹々は「児童の生活環境」という節を設けている『児童問題』(三笠書房、一九三九年)において、ほぼ類似の説明を行っている。野口は、児童が「無事太平に自然の發育經過を辿るのも、外界の諸条件を前提としてのことである」。外界はすでに生活の構成要素なのだ。外界あつて初めて生活内容が組み立てられる。」(野口樹々前掲『児童問題』一五九頁)とした上で、「人間が自分を中心として外界を考へるときこれを環境と呼ぶ。…環境の問題とは自己の生活を中心とし生活と外界との間の交互の影響作用が問題なのだ。だから生活あつての環境だ。」(野口樹々前掲『児童問題』一六〇頁)と説明している。

子どもにとっては、環境は外的要因・外因的要素である。自身の肉体や精神、その発達や変化といったことが外界、環境などと全く無縁に存在し、展開していくのではない。肉体や精神、そしてその発達や成長が外部から孤立して子どもにかかわる問題となっているのではない。家庭、住居、学校、道路、公園、食料・食事、教育や訓練、文化や芸術なども、環境として子どもと触れ合うことにより、成長、発達の重要な糧・要素となる。というより、「すべての教育的目的設

定、すべての教育的希望の中には一つのよりよい環境が考えられてゐる」(細谷俊夫前掲『教育環境学』一一頁)。「つまり「よりよい環境」は、子どもの成長、発達にとって最も重要な要素・因子の一つであり、それだけにその設定・構築は教育の大切な目標の一つにもなるのである。

細谷は、子どもが日々生活する場・地域での周辺状況、またそれらからの体験のみでなく、旅行などに行つた先での周辺状況やそこでの体験もすべて環境に含める。場・地域が変わろうと、「我々を形成するものは、すべてこれを環境と呼ぶ」(細谷俊夫前掲『児童環境学』九頁)というのである。環境は、外部に向かってても、内部に向かつてても境界を持たない。人々が触れ、影響を受けるもの、また体験するもの全てが環境なのである(細谷俊夫前掲『児童環境学』一〇頁)。そこでは、社会・経済環境を軸に、自然環境などすべてが人々、そして子どもにとって意味をもつものである。

当然、学校も環境の一つである。そうであれば、学校が中心になるのではなく、生徒・子どもが中心になる。「学校内の色々な事物」「家庭を中心にした生活領域」「学校以外に、子どもの生活する社会」(細谷俊夫前掲『児童環境学』序一・二頁)という具合に学校を中心に考えるのではなく、あくまでも学校も環

境の一つと考えるのである。

要するに、より良い環境を子どもに提供することが教育の大切な目的の一つであるが、そこでも大切なことは、子どもであれ、人間・人あつての環境ということである。環境が子どもなど人間の主（あるじ）になるのではない。ただ、環境は、人々の外・四囲にありながら、相互作用を通して、まだ受け身の立場の子どもの成育、発達には大きな意味をもつことになる。それが細谷の環境・子供環境に対する認識である。

（2）環境が子どもおよびその教育に及ぼすもの

細谷にあつては、環境は子ども・人間あつての存在である。同時に環境との触れあい、交流なしには人間のことも、その成長や発達も語ることはできない。とりわけ子どもには、より良い環境との触れあいが大切である。それだけ、環境・環境学は子ども研究にとつても重要な意味をもっている。

環境・環境学は、教育の方法としても、また教育学や心理学にとつても不可欠である。細谷は、「最も現実的な科学としての環境学だけは教育者と生徒との間に結ばれる協働社会を護る」（細谷俊夫前掲『児童環境学』八頁）と主張する。だから、「真の教育を建設するため」（細谷俊夫前掲『児童環境学』「序」二

頁）、子どもの環境を徹底的に解剖すべきであると考ええる。環境に関しては、どんな細かいことも、ごく身近なことも軽視してはならない（細谷俊夫前掲『児童環境学』八頁）。環境の解明無しには真の教育も、子ども・生徒の適切な成長・発達も達成できないのである。

もともと環境が教育の世界で取上げられるようになるのは、西洋では主に一八世紀になってからである。産業革命を機に、資本主義経済の発展と共に労働者階級の増大がみられるが、その中で学校に通えない生徒、ランチを持つて学校に行けない生徒が目立ってくる。その背景には、失業、貧困、家庭崩壊など子どもをとり囲む不幸な事態・事象の発生、拡大が存在していたのである。

その頃は、まだ環境という総合的な枠組みの認識はなされていなかった。環境といつても、子どもの身近な周辺にある境遇や事態に対するバラバラの認識であった。その境遇や事態を解決や緩和することによって不幸な子どもたちの問題も、解決や緩和ができるという認識が一般的であったのである。

そこから、「人間の悪化は、社会の改造によって救うことが出来る」という反資本主義的考え・思想も受容され（細谷俊夫前掲『児童環境学』四頁）、「子供の新しい境遇というものから教育を立て直さうとす

る」動き・運動も起こってくる。社会環境的な認識ではあるが、まさに「今日の環境研究の起り」（細谷俊夫前掲『児童環境学』四頁）がうかがえるのである。

かくして、細谷は、環境について次のように四つに分類している。①物理的環境、②生物的環境、③社会的環境、そして④精神的環境である。

①は、心身両面で子どもをはじめ、人々に働きかける立場に立つ環境である。

②は、人々の身体的な欲望の対象になる環境で、食欲、性欲などの対象も含まれる。

③は、動的・心情的な関係、思想的関係、例えば愛情、嫌悪、闘争などを通して社会の中で相互に影響し合う関係に立つ環境である。そして、

④は、真理、自由、あるいは科学、芸術など価値をもって目的を追求する際に、心の支えになる位置や働きかける位置にある環境である（細谷俊夫前掲『児童環境学』一一―一二頁）。

このように細谷は、環境が多様であること、事物に加え価値も含まれるので、いろいろの学問で対応する必要のあることを考えていた（細谷俊夫前掲『児童環境学』一三頁）。

参考までに、私は環境について次のように分類する。自然環境と社会環境の二分法では単純すぎると考

え、それに二つ付加して、四分類にしたものである。

①自然環境

②社会・経済環境

③文化・造形環境

④景観環境

細谷は、私の分類でいうと、②③に力点を置いていたといつてよい。①④は、まだ視野・視界には十分に入っていなかった。そんな環境認識の時代である。

5 細谷の環境学・児童環境学の位置

（1）最大の功績である環境学・児童環境学の提唱

細谷は、学者・研究者としてどのような業績を遺したのであろうか。そのうち最大の業績・功績は何であらうか。

すでに見てきたように、一般的には、細谷の業績と言えば、教育学に関する業績、とくに教育方法、技術教育、大学・学校経営などが評価されるであろう。ただし、評価は多様であつてよいし、皆が同じところに眼を向ける必要はない。私は、細谷に関しては教育および児童をめぐる環境学の日本における挑戦と先導こそ最大の業績と理解している。たしかに、環境学関係の二者は、余りに若すぎる時代の挑戦であり、成果で

あった。文章や表現、また説明や論理性では、生硬さ、未熟な面もみられる。しかし、環境学、児童環境学の看板を大きく掲げたことだけでも、その先駆性を評価できる。そこに古い形式・成果にこだわらず、新しいものを追究する創造性（オリジナリテイ）の視点・姿勢がうかがえるからである。

子どもが、その成育・発達、あるいは生活・学習の際に、つねに触れ合うのが環境である。学校も、そこにおける教師も環境なのである。子ども研究は、子どもの成育、発達とその流れ全体に沿うものである。そのどの場・過程にも常に環境との触れあいが存在している。教育学が観念から現実へ、また一般論から具体化へと適切に対応するには、その成否は環境をいかに認識するか、またいかに受容・吸収するにかかわるといってよい。

心理学や教育学の世界では、四囲の状況など境遇、ひいては環境は、重要な要素として早くから受けとめられてきた。日本でも、とくに社会主義が本格的に導入・展開される明治三〇年代以降、子どもの生活、健康、福祉、就学・進学、労働、文化などを考える場合、境遇など子どもを取り囲む周辺の諸条件が重視された。とくに貧困や劣悪な生活環境がマイナス要因として子どもの生育、発達に及ぼす問題が重要視された。それらの排除、浄化、克服なしには子どもの健全

な生育、発達はないといった認識が高まった。セツルメント運動などは、それに具体的に応えようとする運動であった。

細谷も、欧米では産業革命の進行する一八世紀以降に、また日本では一八九〇年代後半（明治三〇年代）以降に、社会主義者たちが子どもの劣悪な環境を問題視したのが環境研究の始まりと認識していた（細谷俊夫前掲『児童環境学』三〇七頁）。

ただその段階でも、またその後も、社会主義者も、研究者も、環境の問題を自立した学問の対象としてとらえる方向には進まなかった。環境の認識、研究を学以至で止揚しようしたのは、日本では細谷が最初といつてよい。「教育ならびに教育学が、この人と環境との結合に注意を払はないならば、その教育の実際及び理論といふものは単なる遊戯になつてしまふ」（細谷俊夫前掲『児童環境学』八頁）。細谷はそこまで考えていたのである。

細谷は、最初は教育を軸に環境を理解しようとするが、教育環境学、さらに子どもに焦点をあてる児童環境学に進んでいく。

子供にかんしては、その環境を無視しては、教育者が正しい教育を遂行できないし、教育に責任をはたすことができない（細谷俊夫前掲『児童環境学』八頁）。そして教育学、あるいは児童研究でも、環境を

無視しては、正しい学問にも、物事の本質にふれ、責務を果たす学問にもならないと考えた。そこに、教育環境学・児童環境学への挑戦があったのである。

(2) 環境学への取り組みの先駆性

日本の環境研究・環境学における細谷の先導性は、際立っている。

日本において、政策レベルでも、運動レベルでも、公害認識を超えて環境認識が一般化するのは、周知のように一九七〇年代に入ってからである。それから二〇年、三〇年かけて環境学あるいは環境科学が流行ともいえるほど盛行の時代を迎える。大学における環境系の学部・学科の相次ぐ設置、企業における環境研究所、環境保護室・部の相次ぐ新設、環境に関する雑誌・機関誌、著作の相次ぐ発刊がそれである。

それに遡って、学問の世界にあつては、とくに教育学、心理学、芸術・美術、非行・犯罪学では、一貫して環境は重視されてきた。すでに戦前からその傾向は見られた。著作でも高島平三郎はじめ、環境そのものが表題に使用される章や節、また環境の用語こそ使用されないが、同義の内容からなる章や節が取り入れられる著作は、普通のことであつた。昭和初期、つまり細谷が環境学を提起する頃には、環境を標題にもつ著

書・論文も出始めていた。特に教育学の分野で目立っていた。

もつとも、細谷らがかかわる教育学、また関連する心理学では環境といえば「社会・経済環境」への関心が主たるものであつた。失業、貧困、暴力、非行、障害、教育における差別などの領域・問題ではとりわけ境遇など社会環境とのかかわりが重視された。それに対して、芸術領域では、子どもの情操、性格形成などと結びつけて、「自然環境」に早くから注意が向けられていた。すでに一九二〇年代という早い時期から、教育などの問題で自然環境に注目・重視した人物に、土田杏村がいた（『自由教育論』上巻、内外出版、一九二三年）。広い領域において研究・評論のみか、実践にもかかわつた土田が、環境認識でも先行していたことは留意に値する。

一九三〇年代における細谷の教育環境学の登場以降も、教育学、心理学では環境は重視されつづける。第二次世界大戦以後も、その状況は変わらない。

そんな先行と転換を受けて、国の政策や民間の運動領域では、公害から環境へと認識も用語も変わる一九七〇年代、八〇年代以後は、反公害運動に関する著作は、公害から環境に標題・用語を変えだす。担当・管轄する官公庁・役所の部署も、法律も、公害から環境に名称や理念を変える。

その流れは、たんに形式的にうわ辺の名称変更がなされたというだけのことではなかった。社会悪・マイナスイメージを除去・排除する対象となる公害から、より良い環境を創出し、保護するプラスのイメージ・認識へと理念の転換をもたらす意味もあったことは周知の通りである。

教育学、心理学などでは、その間も、一貫して環境は重視される。一九七〇年代以降は一般動向に合わせ、環境を標題とする著作、例えば井上健治『子どもの発達と環境』（東大出版会、一九七九年）、長倉康孝・高橋功『学校環境論』（第一法規、一九八二年）などの著作も刊行され続ける。

(3) 児童環境学の課題

細谷は、素質と環境の関係、すなわちすでに内に持っているものと外界にあつて人々や子どもにかかわるものを認識の根幹に置きつつ、それを超える視点、とくに両者の交流による総合的展開に留意している。

具体的に、細谷は、知的発達、各種体験などと現実の環境の関係、また非行、学習などと家庭生活や貧困など現実の環境の関係を研究、分析する。例えば、問題のある家庭で育つ児童、貧困の中にある児童、貧しい農村の児童、非行に陥った児童などを事例として研

究・分析する。

そんななかで、学べば学ほど、未解決・未解明の問題がたくさん残っていることに気づく。児童環境学が取り組むべき課題、解明すべき課題として、彼は次の五点を指摘する。

①「子供の持つ生活の諸条件」（『児童環境学』二六頁）

②富裕な家庭と貧困の家庭に生まれ育つ子供の比較、それを通してみる「一定の環境に於ける子供の持つ特徴」（『児童環境学』二六―二七頁）

③「子供の人格を形づくる上に働き合ふ、環境と素質との相互作用」（『児童環境学』二七頁）

④「子供の個性のなかで、環境に依存してゐる側面と列立すること」（『児童環境学』二七頁）、例えば体育の成果など素質に依存する学科目と、地理や歴史など環境に影響を受ける学科目の意味や関係

⑤現場で行われる教育における環境の位置・意義にかかわる「環境に対して抱く我々の新しい見方を、一般に行われる教育の事実に至まで及ぼして見ること」（『児童環境学』二七頁）

以上の五点を、細谷なりに今後取り組むべき課題と考えていたことどものうち、とくに重要な課題として受け止めていた。それぞれの環境の実態を調査、分析

し、科学的・論理的に理解、説明すべきであると、当時の細谷は熱心に考えていた。そこでは、人々の素質と環境という内因と外因という伝統的な理解を基本に据えながら、その触れあいを軸に総合的にみようとしていたこともうかがえる。

いふなれば、一方で素質と環境といった伝統的な課題にも目を向けつつ、他方で自分の考える環境に対する新しい認識・見方の導入も課題として訴えていたのである。

そのような子供をめぐる現実の環境の認識・解明なしには、教育学の、また教育学者の役割なり責務なりを果たせないと考えたのである。

6 学問における環境の役割

— 児童環境学が子ども学に寄与するもの —

子どもの成育、発達とは、環境とのよき相互作用なしには順当には進まない。細谷によれば、子どもは、一方で周囲の環境から刺激・影響を受けることによって成長、発達する。他方で成長、発達に欠かせない子ども自身の各種の欲求・ニーズを四囲の環境に向けて発信したり、求めたり、実際に吸収したりすることに

よって成長、発達する。
日本の教育界にあつては、戦前から情操および情操

教育ということが重視されてきた。その際には、子どもが生まれながらにもつてゐる素質・情緒・感情を周囲の環境や教育によつて優雅な情操や品格にまで高めるといふ理解を根底や方法に持っていた。青木誠四郎が「子どもは周囲の刺激から自分の胸に湧いてくる感情によつて動く性質をもつてゐる」、あるいは「情操の陶冶とか、情操の教育といふのは、この生まれつきの情緒を導き高めて、情操にまで届かせること」(『家庭における子どもの鍛錬』二八九頁、主婦の友社、一九四二年)、それを四囲の環境との相互作用で行うと理解している通りである。細谷も、根底に境遇など環境が子どもの良き情操にも、悪しき情操にも影響するという伝統的な考えを根底にはもつていた。

そのような環境との適切な相互作用なしには、子どもの成長、発達は偏つたもの、不十分なものになりかねない。環境に対しては、子どもでさえも無視すること、逃げ出すこともできない。一つの環境をうまく逃れたとしても、他の環境が換わつて現れるだけである。あらゆる環境を排除すること、無視することは不可能であり、またむしろ不自然である。それならば、子どもの場合でも、環境との相互作用の実態・あり方を的確に把握したうえで、それを活用することによつて、子どものより良い成育・発達に結びつける方が賢明である。

また子ども学を構成する基本的な柱になる教育学、児童心理学、小児医学、児童文学、児童福祉学などとそれぞれの研究対象も、子どもにとつては環境である。それらの柱になる領域・課題や研究・活動をつなげ、結び付けるにも、環境およびその認識は重要な役割を果たしうる。

その点で、子どもの心身にわたる成長、発達など全体像の解明や研究には、環境の理解、および環境との関係の理解が是非とも必要である。それなしには、教育・教育学でも、適切で正しい解明や研究は困難である。この辺のことが、細谷の成果から読み取ることができるであろう。

従来、教育や教育学では、「教育とは如何にあるべきものかといふことが中心になつてゐた」（細谷俊夫前掲『児童環境学』二三九頁）。学問にも教育にも、理想や目標は不可欠ではあるが、それが現実とのつながりなしに論じられるのであれば、観念の世界の遊戯に終わってしまう。理想と現実のつながりが大切であるが、それをつなげる柱の一つこそ、教育学や児童学・子ども学では「子供の環境」（細谷俊夫前掲『児童環境学』二三九頁）なのである。

これらからもうかがえるように、細谷の環境認識、それに基づく環境学への挑戦は、極めて興味深く、先駆的である。どのような年代、家族状況、経済状態、

園・学校、地域、関心の中に置かれていようと、子どもは、現実そのものである環境とのつながりを回避することも、無視することもできない。それだけに、現実の環境があらゆる子ども、またあらゆる子どもも研究のつなぎ・つながり役にもなりうる。児童環境学にしても、総合的な子ども学の柱の一つになりうるし、それだけではなく、同時に子ども学のなかで、それを構成する個々の子ども研究の間のつなぎ役、統合化役をも担いうるのである。

結びに

以上のように、個人的関心や社会的ニーズに応えて、新たなものに挑戦し、新たなものを創造・発見するという学問の本質に触れる取り組みを、細谷は若くして、しかも大学在学中、さらに卒業直後の駆け出しのときに、早くも実行した。それを当時の指導教授も支援したのである。

その点で、細谷の大学出たての初期の研究姿勢は、研究者なら誰もが共感、感銘を受ける極めて刺激的な出発であり、挑戦であった。とりわけ一つの特定の事実・事例の解明といった狭く限定された個別課題に対する挑戦ではなく、それを大きく超えて、環境学という研究領域の体系化まで構想するものであったことも

忘れてはならない。そのことも、驚きである。環境・環境学が子ども研究でも柱になりうると予測した上で、その学問体系の構築に取り組もうとする遠大でスケールの大きな挑戦であった。

その挑戦は、すぐに『教育環境学』、さらに『児童環境学』という著作に結実する。しかし、やがて『児童環境学』はほぼ忘れられることになる。細谷の大胆な試みがすぐに一つの学として広く受け入れられるまでにはならなかったのである。学会の結成にまですむのは、さらに遠い先になるのであった。

それでも、やがて細谷の蒔いた種は、成長して子ども環境研究の本格化、そして子ども環境学会の創設に結実することになる。多くの人は、その種を蒔いたのが若き日の細谷であったことに思いを致すこともないかもしれない。しかし、細谷が子ども環境学の淵源に位置している事実は、必ず生き続けるであろう。

著作として世に送り出された以上、忘れられる時期、受け入れてもらえない時期があろうとも、それがオリジナルなもの、通説や既成の研究のあり方、内容、水準を超えるものを持つている限り、全体としては必ずどこかで再評価され、蘇るときが必ずやって来る。細谷の教育と児童をめぐる環境学への取り組みと挑戦がまさにそれである。いったん忘れられても、どこかに光を放ち続けていたことにより、誰かが注意を

向け、見直しがなされるのである。若い日の成果であるだけに、不十分なものをもっていても、それを超えてオリジナルなものが具わっている限り、いつまでも光を失わないのである。

それにしても、若き日の細谷の発想、視点、挑戦、そして成果は、見直されてよいであろう。彼自身学者として成長すると共に、若き日の挑戦と厳しい努力に目を向け直すことがなくなっていく。それだけに、誰か子ども学、とくに子ども環境学を専門とする人が細谷の環境学を再検証する日が訪れることを願っている。

【参考文献】

- 細谷俊夫『教育環境学』目黒書店、一九三二年
細谷俊夫『児童環境学』刀江書院、一九三五年
細谷俊夫『技術教育』目黒書店、一九四四年
細谷俊夫『近代社会の教育』朝倉書店、一九五二年
細谷俊夫『教育方法』岩波書店、一九六〇年
『細谷俊夫教育学選集』全四巻・別巻1、教育出版、一九八五年
細谷俊夫編『教育方法論』教育学入門叢書（7）、誠文堂新光社、一九五五年
『牛歩三八年』細谷先生還暦記念会、学術社、一九七〇

土田杏村『自由教育論』内外出版、一九三三年

『日本の環境』帝国在郷軍人会、一九三六年

野口樹々『児童問題』三笠書房、一九三九年

青木誠四郎『家庭における子どもの鍛錬』主婦の友社、一九四二年

児童心理研究会編『児童研究法』東洋書館、一九四九年

庄司光・宮本憲一『恐るべき公害』岩魚も書店、一九六四年

宇井純『公害の政治学』三省堂、一九六八年

華山謙『環境政策を考える』岩波書店、一九七八年

井上健治『子どもの発達と環境』東大出版会、一九七九年

大場英樹『環境問題と世界史』公害対策技術同友会、一九七九年

大泉溥編『日本心理学者事典』クレス出版、二〇〇三年

師岡章「細谷俊夫——戦後教育学界の権威——」『地域

と教育』第一九号、白梅学園、二〇一〇年

その他教育学を中心にした人名辞典類